

躍動する世界の女性たち

～環境正義から学ぶ女性の新たな力～

盛岡短期大学部

准教授 熊本 早苗

1 はじめに

人種の違いや国境、言葉や文化を超えて、世界で共通してみられる現象がいくつかある。その一つに、自然災害の脅威や環境問題が挙げられる。環境問題は、まさに地球規模でとらえていかなければならない課題であろう。ではそこに、女性はいかに関与しているのだろうか。

アメリカ合衆国において1970年代から環境問題が顕在化してきたが、その背景には、市民活動、特に女性の参画が寄与するところが世論を動かすのに大きな役割を果たしたとの先行研究がいくつかある。その中で、従前は政治・社会運動、環境保護運動などには関心が薄かった市民が立ち上がり、環境運動を進展させてきた点に着目したい。

従前、女性問題と環境問題の共通性を認識する思想の動きは、エコフェミニズムという用語で語られてきた。「母なる地球」というな、いわば母性を強調するようなその思想は、経済的自立を謳った第一波フェミニズムや、社会的公正を求めた第二派フェミニズムから批判されることもあった。しかしながら、エコフェミニズムが従来からのフェ

ミニズムの流れに貢献したこともある。それは、文明vs自然、男性vs女性というような二元論を超えて、新しい第三の声、もしくは、二元論では見えなかった何かを追究しようとする姿勢である。

本論では、こうしたエコフェミニズムの思想史的観点を踏まえたいうで、その思想を用いた実践的な事例から共に考えていくことを目的としたい。

2 躍動の胎動——レイチェル・カーソンの人生に学ぶ

最初に、アメリカ文学において「地球の悲鳴を聴いた詩人」と呼ばれ、女性海洋学者のパイオニアとして道を拓いた文学者に言及したい。まだ公害問題が環境問題として捉えられていない時代に、後に環境正義運動へと発展するような意識の変換をもたらした作家こそ、レイチェル・カーソン(Rachel Carson, 1907-1964)である。

1920年代のアメリカ合衆国において、女性が4年制の大学まで進学するのは極めて珍しい時代であった。しかし母マリアは、聡明なレイチェルに教育を受けさせたいとの強い信念から、高等教育への進学を支援する。その期待に沿うように、レイチェルは高校をきわめて優秀な成績で卒業し、大学進学のための奨学金を得て、ペンシルヴァニア女子大学（現在のチャタム・カレッジ）文学部英文学科へ入学。

作家になるべく英文学を専攻していたレイチェルは、大学2年になると必修科目として自然科学（生物学）を選択し運命の出会いを得る。

男性の教授陣が圧倒的であった頃、若い女性でありながら大学で教鞭をとるメアリー・スキーカーとの邂逅を通して、レイチェルは生物学者としての道に光を見出した。野外観察の授業において、丘陵に太古の海の化石を見つけたことで、彼女の関心は、海へと向いていった。

当時の女性にとっては「男性の世界であり女性が入ってはいけない」とさえいわれていた理系の道へ、海の生物を研究する道を究めるべく進み始めたことは、勇気ある決断であった。第一、女性が理系の分野で就職できるのかどうかの前例もないに等しく、確実な道が約束されていない将来へ進むこの決断は、カーソン一家にとって、大きなものであった。第二に、この時期に姉マリアンが40歳の若さで病死し、小学生であった姉の2人の娘が孤児となった為、レイチェルと母マリアが姉の遺児を引き取り育てることになったからである。定職に就き家族を経済的に支える必要性に迫られたこともあり、漁業局で海洋生物学者の専門職を受験。女性の受験者1名でありながらも、トップの成績で合格し、念願の公務員となった。

一方で作家としての夢も諦めていなかったレイチェルは、昼は公務員として働き、帰宅後は自分の作品を書くという生活をしてきた。働きながら、なおも学び続ける、という姿勢がこの時代にも見受けられる。そして1941年秋、小説家としての第1作目は、『潮風の下で』(*Under the Seawind*, 1941)と題して出版された。この本には、それまでの学業を支えてくれた母に捧げる献辞が刻まれている。

出版から5週間後の12月7日(日本時間では12月8日)、真珠湾攻撃が起こり、ルーズヴェルト大統領が宣戦布告を発表した。アメリカが第二次世界大戦へと参戦し、人々が読むものは戦況を伝える新聞が中心であり、当然、海の生き物について書いたレイチェルの本は見向きもされなかった。1940年以降、すべての政府機関は軍事優先となり、漁業局は生物調査局と合併され、魚類野生生物局へと組織編成された。政府は戦果をあげるために、海や海岸線、海底についての調査や岩礁の地図作成などを命じたのである。

この時期、イタリア戦線では、シラミが媒介する発疹チフスを予防するために、兵士たちに殺虫剤のDDT¹をふりかけていた。レイチェルの部局にもその情報は入り、やがて彼女の著書の主題となっていく。

1950年代は、レイチェルにとっても、激動の10年であった。母マリアは87歳となり関節炎の悪化から介護を要していた。さらに、若くして病死した姪の息子5歳ロジャーの親権を持つことになる。レイチェルは50歳にして5歳の子どもの子育てと、90歳近い親の介護を同時にしなければならない状況で『沈黙の春』(*Silent Spring*, 1962)に着手していたのである。海洋学者として第一人者となったレイチェルだが、子育てや看病、介護、そして一家の収入を得る担い手といった、現代の女性が直面する課題とも無縁ではなかったのである。

レイチェルは、DDTを浴び続けた昆虫が、殺虫剤に対して強い抵抗性と免疫性²を持つ子孫をつくり始めることに気がついていて、これらの化学物質が食物連鎖³のなかで濃縮され、最終的に、DDTは人間の体の組織や器官にまで到達して、癌のような病気をもたらすことを伝えなければならないと考えるようになる。

¹DDT…有機塩素系殺虫剤。1873年に合成された化合物で、殺虫作用があることが判明したのは1939年。殺虫作用を発見したのはH.J. ミューラーで、ノーベル賞を授与された。第二次世界大戦の戦場では、病気を媒介するノミ・シラミ・蚊の駆除に威力を発揮し、戦後は農業用・可提要に大量に使用された。日本では1971年以降使用が禁止されている。

²抵抗性と免疫性…殺虫剤や細菌剤のような薬物を長く使用していると、外注や病原菌がその薬に対して強くなること。その結果、最初の濃度では効かなくなるので、濃度を上げたりさらに強い薬剤を開発することになる。

³食物連鎖…自然界のなかではエサにするものとエサにされるものがあり、微生物→小魚→大魚→人間と鎖状につながっている状態。このつながりのなかで生物が外からとりこんだ物質は高い濃度で蓄積されていく。

地道な資料収集をしていた1958年、レイチェルの母マリアが他界。その数週間後、彼女は次のような手紙を親友宛に記している。

母は、生命を愛し、すべての生き物を愛していました。それは母の際立った性格でした。おだやかな、情け深い人でしたが、間違っていることに対しては、激しく戦う人でした。私の仕事に対する母の思いに後押しされて、私も早く仕事に戻り、完成にこぎつけたいと思っています。(ワーズワース (上遠訳)、『レイチェル・カーソン』 p. 144)

3 変化への兆し——『沈黙の春』とレイチェルの命賭けの闘い

『沈黙の春』の完成の背景には、母マリアの意志を継いで、「間違っていることには、激しく戦う」という精神が貫かれていた。しかし皮肉にも、この頃、1960年春、レイチェルの体を蝕んでいたのは、悪性の癌であった。『沈黙の春』は、まさに彼女の命を賭けた一冊となる。『沈黙の春』は、1962年から雑誌『ニューヨーカー』に数回にわたって連載され、3ヵ月後にホートン・ミフリン社から単行本として出版される。2週間もたたないうちに『沈黙の春』は『ニューヨークタイムズ』紙のベストセラーリストに姿を現し、同年、20数カ国に訳されて全世界に衝撃を与えることになった。

一方で、全米農薬協会や殺虫剤製造会社は、出版社やカーソンを告訴すると脅かし、多額の費用をかけて『沈黙の春』の内容は間違っており、『沈黙の春』など信じてならないという批判的論戦を展開。様々な嫌がらせの中には、彼女が「女性」作家であることや独身（既婚者ではない）ことを批判する類もあった。

やがてレイチェルのデータの正確性や内容の信憑性が証明されていき、メディアは一定の評価を共有するようになる。この時期、最高裁判所判事であるウィリアム・O・ダグラスは、『沈黙の春』について、「この本は、我々人類にとって、今世紀のもっとも大切な記録である」と語っているのは興味深い。

こうした、民意の高まりとともに、当時の大統領ジョン・F・ケネディ⁴ (John Fitzgerald Kennedy) は、大統領の科学技術諮問委員会のなかに農薬委員会を設けることを発表し、カーソンもその委員に就任。数ヶ月の調査の後、科学技術諮問委員会は、農薬の危険性について人々に警告したレイチェルの行為をたたえとともに、それを認めようとしなかった政府機関を批判する報告書を公表した。いわば、『沈黙の春』で訴えたことが、真実であると認められた瞬間である。この当時、ガン末期患者となっていたレイチェルは、歩くこともままならず、車椅子で科学技術諮問委員会に出席するほどだったが、メディア報道では一切、その部分は放映されなかった。彼女が病魔に冒されている事も、内密にされていた。亡くなるまで、闘病中であることをメディアには決して明かさずに、隠し通したのである。

4 現代におけるレイチェル・カーソンの意義

レイチェルは、「人間と、ほかのあらゆる生命体との関係」に目を向けることの重要性を後の世代に伝え、託し、1964年4月14日、メリーランド州シルバー・スプリングの自宅で56歳の命を終えた。その

⁴ジョン・F・ケネディ (1917-1963) …アメリカ第35代大統領。ニューフロンティア政策を掲げて宇宙開発や人種問題に取り組み、積極的な対ソ政策で協調外交を展開。大統領在任中に遊説先のグラスで暗殺される。

生涯からは、彼女がまだ女性には開かれていなかった領域を、人一倍の努力と強い信念で開拓していった様子が分かる。そして、カーソンの意志を継ぐ後継者たちが環境文学の文壇に続々登場した1990年代から2000年代は、日系人やメキシコ系作家など、それまでアメリカ文学の主流からは外れていた、いわばマイノリティの女性作家たちが、自らのルーツを紐解きながら、共通点として環境汚染と女性を浮かび上がらせていることが明らかになる。ここで、白人だけに限らず、人種・文化の多様性が前景化されていく。汚染と身体についての物語は、人種や文化を超えて、語られなければならないという課題が見えてくる。

5 環境正義運動へ——沈黙を破り、行動を起こす

では、実際の環境汚染や、それに対する抗議運動とは、どのようなものなのであろうか。環境汚染が人種的マイノリティだけに偏っているものではないことを立証したのが、ニューヨーク州ナイアガラ・フォールズ市で起きた、ラブキャナル事件であった。ラブ運河の名称は1890年代に資産家ウィリアム・ラブが、水力発電を試み、ナイアガラ滝につなげるように運河を掘ったことに由来している。

ラブ氏は工事途中で資金難に陥り、開発工事を放棄。地元にある化学薬品会社のフーカーケミカル社（現在のオキシデンタル・ケミカル）がその運河を買い取った。なぜなら、フーカー社の工場から出る化学廃棄物を投棄する場所として、活用するためであった。薬品会社は、1942年から1953年までの間に、推定21,800トンの化学廃棄物を運河に捨て続けた。当時の法律では、こうした投棄は合法的な行為であり、認可を得て投棄していた時代であった。

その後、運河は埋め立てられた。フーカー社は埋め立てた土地を、

破格の値段1ドルで市の教育委員会に売却。その際、「一切のトラブルの責任は負わない」という条件をつけていた。

埋立跡地一帯には、高級住宅地が誕生することになった。DDTやダイオキシンなどの有害物質が含まれている化学廃棄物の樽が数千個ぎっしり埋められた跡地の上には、小学校が建設されたのである。

そのことは、当時の市民にはまだ知らされていない。1976年、24歳で念願の一軒家を持たたロイス・ギブス（Lois Marie Gibbs）一家もその一人であった。20歳半ばで自分の持ち家を建てる喜びに満ちた若い夫婦は明るい未来を思い描いてラブキャナルに引っ越した。ギブス一家の1歳になる男子は健康そのものだった。ところが、ラブキャナルに引っ越してからというもの、酷いアレルギーを発症、白血球値が激減し、腎臓疾患で入院を繰り返すようになる。実は、ロイス・ギブスたちが引っ越して間もなく、1976年頃から、大雨が降るとラブキャナルに異臭が漂うようになっていた。有害物質を含んだ汚水がしみだし、それが大気中に蒸発して、誰もが「なんか、化学薬品っぽい臭いがする」と言い合うようになっていた。

1978年にニューヨーク市と米国環境保護庁（EPA）が行った調査で、ラブキャナルの住宅地そして小学校の校庭から、82種類の化学物質が検出され、そのうち、11種類は発がん性のある化学物質であることが検証された。そのことが、ナイアガラ・フォールズの地方紙『ガジェット』に記事として掲載されるや否や、母としてロイスは、「息子マイケルの病気と、この化学物質って関係あるかも？」と直感する。

彼女はまず、近隣の家を一軒一軒訪問し聞き歩いた。100軒ほども訪問したところで、ラブキャナルで生まれた子どものうち、56%が、何らかの先天的身体障害や深刻な病状をもっていたことが判明。ある

隣り合った3軒の家では、同時期に生まれた子どもたちが、親同士はまったく遺伝的共通性はないのに、新生児が全員、指の本数が少ないという共通点があった。流産や死産が異常に多い。しかもそこにはある地理的共通点が潜んでいた。

昔の地下水脈の地図と流産や奇形児が生まれた家の並びを照らし合わせてみると、見事に地下水脈上にある家の子ども達や妊婦が多大な影響を受けていたことが判明したのである。ロイスが探し当てたニューヨーク大学の専門家によると、有毒物質の数値からいって、アメリカの一般成人男性の身長と体重で計算しても、週に40時間以上滞在すると、癌を発症するといわれる状態であった。そこに、女性や幼い子どもたちは毎日、ほぼ一日中いたのだから、160時間以上有害物質にさらされていたことになる。

6 ラブキャナル事件から学ぶこと

子ども達を守るために立ち上がった母親たちは、連携し始め、男性をも巻き込んで、1980年には、独自の住民組織（現「健康・環境・正義支援センター」、通称CHEJ）を設立し、現在も地域住民を助けて環境正義の実現のために行動している。

ロイスは、その後、環境正義に関するシンポジウムを続々開催し、主婦や母親の声を行政に届けるべく働きかけた。やがて、その取り組みは、社会的評価を得ていく。2003年にはノーベル平和賞の候補者にまでなり、日本でも彼女の自伝は翻訳され、『ラブキャナル——産廃処分場跡地に住んで』として2009年に出版されている。

結果的に、1980年には、カーター大統領（当時）が非常事態宣言を発令し、同地から約900世帯の住民が移転し、別の安全な地域に移り

住み、汚染地域の浄化対策が行われた。

こうした一連の環境正義運動の意味をレベッカ・ソルニット (Rebecca Solnit) の『災害ユートピア』 (*A Paradise Built in Hell*, 2010) に見出したい。ソルニットは、同様の環境汚染が起きた地域においては、躍動する女性たちに共通していたのは、第一に、ピンチをチャンスに変え、さらには、ピンチをチェンジ (社会変革) へと変えていった力である。環境汚染は、守るべきものをもつ女性の力強さ、結束力・連帯の力を浮き彫りにした。第二に、様々な職業や家庭状況と向き合わなければならない女性たちの活動は、助け合いの精神や相互扶助の関係性がなくては成り立たないものであった。男性主体の活動よりも、さらに柔軟で、時に即興的な対応が可能となる組織運営が求められた。『災害ユートピア』の末尾で、ソルニットは次のように述べている。

《地獄の中のパラダイス》は即興的に作られる。わたしたちはそれを状況に即して作るが、その過程で、わたしたちの強さや創造力が求められる。地獄の中につくられたこういったパラダイスは、わたしたちに何ができ、わたしたちが何になれるかを教えてくれる。(440)

7 おわりに——地球憲章の思想へ

女性が環境問題にリーダーシップを発揮したことによって、ローカルな環境問題の解決という立場から出発した活動は、他国の環境資源や公衆衛生をめぐる戦いをも視野に入れ始め、やがてその裾野が広がっていった。地球は海や大気ですべてつながっている。いわば、「ロー

カルな環境問題といったものは存在しない」という点に着目することで、様々な分野の人の交流を可能にした。国境を越えて共有される環境リスクを理解し、互いに共感しあうことで、ローカルな観点とトランスナショナルな観点の両方をつないでいったのである。

主な参考文献

- 伊藤詔子 (2011) 『オルタナティブ・ヴォイスを聴く』 音羽書房鶴見書店
- 小塩和人 (2014) 『アメリカ環境史』 上智大学出版会
- スコット・スロヴィック/伊藤詔子監修 (2008) 『エコトピアと環境正義の文学』 晃洋書房
- レベッカ・ソルニット/高月園子訳 (2010) 『災害ユートピア』 亜紀書房
- WEB 地球憲章「グリーンクロスJapan」<http://www.gcj.jp/action/>
2016年9月4日アクセス

Works Cited

- Antonetta, Susanne. *Body Toxic: An Environmental Memoir*. NY: Counterpoint, 2002.
- Blum, Elizabeth D. *Love Canal Revisited*. NY: UP of Kansas, 2008.
- Carson, Rachel. *Silent Spring*. NY: Houghton Mifflin, 2002 (1962).
- . *Under the Sea Wind*. NY: Penguin Classics, 2007 (1941).
- Castilo, Ana. *So Far from God*. NY: W.W. Norton, 2005.
- Gibbs, Lois Marie. *Love Canal and the Birth of the Environmental Health Movement*. Washington: Island P, 2011.
- Solnit, Rebecca. *A Paradise Built in Hell*. NY: Penguin, 2010.